■ 質疑回答リスト

2026/10/6

	討議・報告タイトル	発表者	質問	回答
1	【報告②】「BIM活用の実情把握に関するアンケート」の実施報告	BIM啓発専門部会	BIMワークフローとは何でしょうか？	BIMを活用して、建築プロジェクトの企画・設計・施工・維持管理までの情報を一貫して管理・共有する業務の流れ（Workflow）のことです。 BIMを中心とした業務の手順、情報の連携を図るもので、具体的には、もの決めなどのキーデートや、発注者、設計部門、BIM 支援部門、作業所、専門工事会社などの関係者間の連携のタイミングを示します。
2	【討議①】設計と施工が共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	設計・施工の間の「積算」がBIMの広がりの中で、数量の拾いが楽になっている反面、積算書は表形式でBIMの流れているように感じておりますが、部会での議論で何か積算に関する意見は上がりましたでしょうか？	BIMを活用した「積算」については、部会内でも関心が高く、どのような手法が有効であるかについて議論を重ねています。一方で、設計モデルを活用してすべての部位の数量を正確に把握することについては、モデル精度や入力情報の充足状況などの課題があり、現時点では難しいとの認識です。そのため、まずは対象とする部位や範囲を限定したうえで数量を把握する手法が有効であるとの意見が多く挙がっています。
3	【討議①】設計と施工が共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	CDEを発注者が用意する場合、社内的なナレッジとして事例を共有しづらいというのがあるかと思いました。どうでしょうか？	ご指摘のとおり、個別プロジェクトに関する具体的な内容の共有には一定の制約があると認識しております。しかしながら、CDE環境を活用した情報共有のメリットや課題、運用上の工夫、共有対象となる情報のあり方などについては、社内の知見として整理・展開する価値が十分にあると考えております。
4	【討議①】設計と施工が共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	ゼネコンの設計施工案件でフロントローディングの取組みを行う事は絶対条件に思います。一方で、かなり前段階でもの決めをしないとならない施主にとってのメリットはどこにありますか。皆さんは施主に「〇〇という理由でFLを行い、ここまでにコレを決めて頂きたい」と説明していると思いますが、どんな言葉で施主にFLを説明していますか。	まず、プロジェクトのすべての内容を早期の段階で確定することは現実的には難しいと考えております。フロントローディングにおいて重要なのは、発注者とのタイムリーな情報共有と、それに基づく適切な意思決定を継続的に行うことにあると認識しています。こうしたタイムリーな意思決定を実践することで、手戻りを最小限に抑えながらプロジェクトを推進でき、結果としてプロジェクト全体のリードタイムの短縮や工程遵守につながります。また、それは品質向上やコストリスクの低減にも寄与し、発注者にとって大きなメリットになると考えております。
5	【討議①】設計と施工が共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	設計・施工の共創を進めていくには現在の設計期間を見直す必要があると考えます。 着工、竣工日ありきではなく、施主を踏まえて今後、適正期間を協議されていくのか教えていただきたい。	ケースバイケースではありますが、設計施工方式を前提とした場合には、ご指摘のとおり設計期間の見直しが必要となるケースもあると考えております。重要なのは、着工日ありきで検討を進めるのではなく、発注者とともにプロジェクト全体のスケジュールを早期に検討・共有し、最適な進め方を構築していくことです。その結果、手戻りの削減や効率的な意思決定につながり、プロジェクト全体の円滑な推進が期待できると考えております。
6	【討議②】設備工事で共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	設備分離発注等により設備専門工事会社の参画が遅れる場合でも、施工知見を設計初期から取り込むために、ゼネコンはどのような体制・役割分担・発注上の工夫を講じるべきでしょうか。	設備専門工事会社の参画が遅れる場合でも、ゼネコン設計部門を中心に施工・調達部門や技術者によるレビュー体制を設け、納まり、施工性、機器搬入、維持管理性を設計の節目ごとに確認します。設計者は要求条件と設計意図を明確にし、施工部門は施工・工程上のリスクを確認し、専門工事会社の参画後に詳細な製作・施工条件を反映します。発注面では、技術協力の先行発注と、協力範囲・成果物・責任区分の明記により、早期検討を正式な業務とすることが有効です。BIMは検討事項、決定時期、役割分担を共有し、手戻りを抑える基盤として活用することが出来ます。
7	【討議②】設備工事で共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	干渉確認にとどまらず、加工・施工・維持管理へデータを展開するため、設備専門工事会社は自社の施工ノウハウや製作条件を、どの範囲までBIMデータ・属性情報として上流工程へフィードバックできるでしょうか。	設備専門工事会社が上流工程へフィードバックできるのは、設計判断や他工種との調整に必要な範囲の施工ノウハウ・製作条件です。具体的には、機器や部材の外形・接続条件、必要クリアランス、支持条件、搬入・施工・点検スペース、概算重量などを、BIMの属性情報として共有することが考えられます。一方、詳細な加工方法、原価、固有の施工手順など、各社の競争力や知的財産に関わる情報は共有範囲を限定すべきです。BIMの情報を加工・施工・維持管理まで確実に活用するには、情報項目、定義、入力主体、確定時期、詳細度、更新・承認方法を業界共通のルールとして標準化することが重要と考えます。
8	【討議③】鉄骨工事で共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	構造BIMモデルを「正」として鉄骨BIMモデルへ連携するために、現状で最も大きな技術的・運用的課題は何ですか。	現状最も大きな課題は、単なるデータ変換技術ではなく、構造BIMモデルの情報を設計成果として確定し、その正しさを関係者が保証できる業務プロセスが確立されていないことではないでしょうか。鉄骨工事は製作期間が長いため、設計図書の未確定や製作図作成後の変更が、もの決め工程の遅延に直結します。BIMを形状の可視化だけに使うのではなく、正しい情報を伝達し、変更内容と影響を関係者間で共有する仕組みとして運用するといった視点で活用する必要があると考えます。
9	【討議③】鉄骨工事で共創するBIMワークフロー	建築BIM合同会議	鉄骨ファブリケーターが実施設計途中からBIMを開始する現状に対し、より早期から参画するためにはどのような体制や契約スキームが必要でしょうか。	早期技術協力と製作・施工を分けた二段階の契約とする方法が考えられます。製作性検討、鋼材調達計画、概算数量、工程検討、他工種との取り合い確認などを製作契約前の無償協力ではなく、正式な業務として契約することと言えます。早期参画を単純な「設計業務の前倒し」にするのではなく、後工程で発生する課題を早期に発見し、関係者が共同で解決する業務として評価することが重要です。